

ブータン難民の教育の歴史と現状

リングホーファ・マンフレッド
大阪産業大学教授

1 ブータン難民の発生の背景

ブータン難民の教育について論じる時、なぜ約12万人のブータン国民が定住した国から離れた実態について多少説明をせざるを得ない。だが、その背景および原因に対し、さまざまな解釈が存在している。本論文では筆者が省略した形で、その解釈のひとつを提供する。歴史的や政治的背景に関心のある方は文献目録を参考にいただきたい。ブータン政府は、難民発生をもたらした政策が、「ブータンの固有の文化を守るため」であったと強調してきた。しかし、そこには二つの矛盾が含まれている。1点目は、ブータン社会が多民族・多文化社会である現状を否定することになる。近年までに、世界に向かって、ブータンには王家の民族(Ngalong=ンガロン族、Drukpaは民族名ではない)しか住んでいないような国の紹介しかなかったのである(注意1: David B.Thronson "Cultural Cleansing", INHURED International, Kathmandu, Nepal, 1993, pp.1)。

2点目は、現在に至るまで信頼できる国勢調査が実施されなかったのも事実である(注意2: 国立民族博物館勤務の栗田教授の証言、1997年10月、または1998年8月ブータンの統計局に直接、資料提供をお願いした東大4年生の三戸さんが統計がないといわれたようである)。確かに、ブータン政府が人口の統計だけでなく、各地方自治体に居住している各民族の統計も発表していない。それを考えると、ネパール系民族がいつの時点で何名であったかという客観的なデータで証明できない。勿論、それと同様に、「不法移民」の数も把握できないことが言える。結局、ブータン政府が「%」だけを持って、主な民族の分布を簡単な形でしか発表していない(しかしその数が統一性がなく、信用ができない)。その他に人口との関連で、ブータン政府が数年前までに発表してきた160万人以上の人口の数字を2、3年前

から100万人を減らしながら発表した。例えば、日本外務省の研究所の1996年の開発援助のODA白書では、1994年の人口が167万5千人となっていたが、1998年版には、同じ1994年の人口は100万人少なく、67万5千人となっていた。(注意3: 外務省経済協力局編「我が国の政府開発援助ODA白書、下巻」、1996年10月、p.218。同編「我が国の政府開発援助 ODA白書、下巻」、1998年10月、p.211。または、インド人の政治家で、1960年代ブータン国王のアドバイザーだったNari Rustomjiさんが、1963年のコロombo・プラン関係の国際会議の準備の時、Rustomjiさんがブータン政府の代表とともに、人口の数字をはじめ、数多くのデータを根拠なしに、提出した。Nari Rustomji, "Bhutan The Dragon Kingdom in Crisis", 1978年、Delhi、p.32)。

上記の人口と民族分布において不明な点が多く、ブータン政府の発表は信頼できないが、他方、不法移民の流入もある程度ほどあったことも全く否定できないと思われる。しかし、本論文の対象となっている、ネパールの東南部に住んでいる10万人弱の難民の90%以上が、ブータン国籍所有者である証明書を持っている。(注意4: ネパール法務省の1995年の調査結果によると、難民の世帯主の85%が国籍証明書を持ち、さらに10%は納税証明書、と他の3%は学校在籍証明書を持っていると判明した。2%だけが証明書を所有しなかったが、そのほとんどは国を出る時、証明書は警察や軍隊によって取り上げられたと証言している。数多くの難民が当局によって一部の証明書が取り上げられたと訴えている。しかし、ほとんど全員(98%)が一部の証明書を持ち出すことに成功したようである(AHURA BHUTAN "Victims of forced eviction", Jhapa, Nepal, 1999, p.24)。99年6月現在難民キャンプで暮らしている難民の数が96,617人であったが、半年後の時点で減少の傾向

表1 難民キャンプの人口(1999年12月末現在) (1999年6月)

キャンプ名	人数	人数	男	女
Khudunabari (クドゥナバリ)	12,068	12,124	6,101	6,023
Timai (ティマイ)	9,160	9,191	4,721	4,470
Goldhap ゴルドハブ)	8,587	8,643	4,487	4,156
Sanischare (サニシャレ)	18,703	18,829	9,623	9,206
Beldangi-I (ベルダンギー I)	16,486	16,758	8,516	8,072
Beldangi-II (ベルダンギー-II)	20,551	20,726	10,504	10,222
Beldangi-II-Extension (ベルダンギー-IIエクステンション)	10,439	10,517	5,378	5,139
合計	96,024	96,617	49,330	47,287

(注意5：12月末のデータはCARITAS NEPALの提供、2000年3月13日、未刊、6月のデータはRefugee Coordinating Unit〔ネパール法務省の機関〕)

が上記表1のように見られる。

教育問題を取り上げる前にブータン難民問題全体に関する誤解を正す必要がある。すなわち、世界中のほとんどのマスメディアと一部の研究発表においても、この難民問題が「民族問題」であるように論じられている。1988年から2年間の間に民族問題であったように見えたが、同化政策および国勢調査中に行った人権侵害に対し、1990年の秋に反対意思を表明したデモの参加者には、ネパール系以外の民族出身者が含まれていた。そしてそれ以降に実施された国外追放（直接と間接）によって生活基盤を失った人々の中には、他の民族（ンガロングを含む）も数千人ほどいる（注意6：1993年3月20日、難民キャンプ内、筆者が数名の難民から、のこのような内容の証言を聞き、そしてそれを裏づけるようにキャンプが1991年設置された時、ンガロング族の難民も住んでいたが、大多数のネパール系の難民に理解されず、キャンプを離れたそうである。）

または、1994年6月亡命先のネパールで創立されたDruk National Congress (DNC)の会員は、ンガロング族とシャルチョブ族(Shar chopは一番古くからブータンで暮らしている民族と言われている)の難民しかいなかった(注意7：Druk National Congress "The Silent Suffering in Bhutan", Kathmandu, 1994)。そして1997年創立のUnited Front for Democracy (UFD)が全ての難民を統一した組織であった。または、シャルチョブ系民族のチベット仏教であるNyingma

派のお坊さんが1997年10月に地方公務員によって殺害され、その後、約1年間の間に、宗派の上部組織の方々の逮捕をはじめ、お寺の閉鎖と600人ないし900人のお坊さん(ラーマ)とその弟子が国を去らなければならなかった(注意8：1999年3月6日の20人以上のラーマの証言を、亡命先のネパールの東部にあるBirtamode市で筆者が聞いた、Shri Lhomon Ngagyur Nyingma Association, "Release Khenpo Thinley Ozer Immediately", Birtamode, Nepal, 1999。その他にアムネステイ・インターナショナルの良心の囚人のThinley Ozerさんの関連資料も文献目録で参照)。数百年間、協力体制にあった王系民族のDruk派と協力体制であったNyingma派は民主主義運動の指導を取ったために、弾圧された可能性を否定できない。

上記の過去6年間の難民の動きを通じて、平均的学力が他の民族より高い(どの民族所属者も、筆者に言われてきたこと)ネパール系ブータン人が民主主義と人権尊重などの運動を指導した後に、他の民族も参加したと言えるのである。と同時に、ブータンの王家、政府およびエリートの一部は自民族の文化を守る名目で、民主主義、人権尊重と言論の自由を警戒し、自己利益および地位を失わないようにあらゆる方法を利用している。(注意9：Druk National Congress, "The Silent Suffering of Bhutan" Second Edition, Kathmandu 1996)。

1999年12月17日に釈放されたTek Nath

表2 生徒の数は合計36,507人(1998年12月末現在)

Class	PP	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	合計
男子	1854	2371	2550	2406	2761	2753	1877	1207	783	19,318
女子	1848	2535	2673	2598	2496	2271	1305	668	382	17,189
合計	3702	4906	5223	5004	5357	5024	3182	1875	1165	36,507

(注意13: UNHCR Kathmandu "FINAL SUB - PROJECT MONITORING REPORT (SPMR) (PART - II)", February, 1999, p.9)

表3 生徒の数は合計36,273人(2000年2月29日現在)

Class	PP	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	合計
男子	1782	1986	2675	2145	2491	2270	2868	1711	878	18,806
女子	1827	2035	2732	2335	2653	2069	2332	1042	442	17,467
合計	3609	4021	5407	4480	5144	4339	5200	2753	1320	36,273

(注意14: Caritas Nepal, "Bhutanese Refugee Education Programme, Students' Statistics as of 29 February, 2000")

Rizalさん(ネパール系ブータン人)が1989年に逮捕される数ヶ月前に、ODAの悪用を指摘したこと。その逮捕は、一部の政治家の報復措置であったのである(注意10: AMNESTY INTERNATIONAL "Bhutan: Appeal for the Release of Tek Nath Rizal", London, 1994)。筆者が1996年3月に、数多くの難民の指導者から聞いた発言に基づいて言えるのは、Tek Nath Rizalさんは全てのブータン難民にとって民主化の父として尊敬されているということである。以前、ブータン国王の諮問委員会のネパール系出身で、政治家としてとても高く評価されてきたRizalさんのシンボリック的存在を理解しようと思えば、彼を「ブータンのマンデーラさん」であると評価することが一番適切であると思う。

II 難民キャンプの設置

1990年秋に、ブータン国内の上記のデモ以降、ブータン政府または地方行政の責任者によって、さまざまな手段でネパール系のブータン人を国から追放した(注意11: 筆者も1993年から7回にわたって直接難民からその体験を聞いてきた。または難民の証言を紹介している書物が文献目録の多くの出版物にも含まれている)。難民が1990年末にまずインドへ亡命したが、インド政府がブータン政府との友好関係であるため、難民キャンプの設置を許可しなかったため、1990と特に

1991・1992年に約8万人がネパールの東南部のJhapaとMorang地区に流入し、1992年・93年の間にUNHCR(国連難民高等弁務次官)によって7箇所のカンパが設置された(注意12: United Nations High Commissioner for Refugees, Sub-Office Jhapa, "Bhutanese Refugees in UNHCR-assisted camps in Nepal, Briefing Note "November 1997, 1枚目)。

III ブータン難民キャンプ内の学校教育

1. 学校の設置と生徒数

現在は、キャンプ内の教育の責任がUNHCRに委託されているCARITAS NEPALにある。UNHCRの予算でPreprimary (PP) からClass8(中学校2年)まで、そしてCARITASの資金でClass 9と10(高校1年まで)が運営されている。最初の学校は、PPからClass 8まで、1991年の末にMaidhar(マイダル)キャンプにできた。このキャンプは川底で設置され、雨期の際、衛生問題(伝染病)が多発したため、1年半しか利用されなかった。そしてもう一箇所Timai(テイマイ)キャンプにも同じ時期に学校教育が始まった。勿論、青空学校しかなく、学校年度別、3シフトで、朝6時半から夕方まで授業が実施された。

上記表2、3の9学級が1998年9月6日にネパールの文部省によって認可されたため、生徒が将来、ネパール、ブータンやインドで、どの学校にも入

学資格を持つようになった。上記の統計で分かるように、小学校3年生または4年生までは女子が男子より多く、それより上の学年度になると女子の割合が減少する。その解釈として言えることは、近年に女子教育に対する考え方が変化してきたことであろう。その理由は、農民であった、多くの親が教育を受ける機会がなかったのに対し、密集の難民キャンプで、子供に教育を与えるチャンスが生まれてきたからである。ブータン国内で地理的や伝統的価値観（特に女性に対して）等の理由で教育を受けることが不可能の子供が、難民になったため機会を得たのである。女子生徒が低学年に多いという背景が出生率の高さだけでなく、ブータン難民の教師達が厳しい規則の導入にもよるのである。即ち、一回退学した場合、二度と学校に戻れないのである。そのため、いわゆる中退(Dropout)がほとんど存在しないし、UNHCRの資料にも就学が100%であると指摘されている。(注意15: UNHCR, "Bhutanese Refugee Education Programme in Camps, 18 March 1998, Kathmandu, p.1)。高学年の女子生徒の減少の背景としていくつかの点が考えられる。難民生活が長期化することにつれて、親側も教育こそが難民の状況を乗り越える機会であると理解し、娘を学校へ生かすようになった。だが、10歳以上の女子生徒の割合が減っていることが、やはり家事の手伝いで忙しくなる理由が一番大きいと思われる。そして、クラス6以上の学年度になると、難民となったため、数年間に学校へ行けなかった生徒が、男女問わず多くいるので、結婚年齢にも達している女性が含まれている(注意16: 筆者が難民の先生から得た情報、1995年3月2日)。

2. 学校の設備

1991年の時、青空教室しかなかったが、1992年末に、テイマイとBeldangi-I (ベルダンギ-I)のキャンプでそれぞれ1校の学校が60センチの煉瓦壁の上に竹の棒が差し込まれ、ブリキの屋根つきとなっていた。だが、そのタイプの2箇所が最初で最後の学校となった。その背景にネパール政府の政策方針が働いていた。それによって、帰国する時、学校の建物を含む全てのキャンプの家を壊すように、元の自然の状態に戻れるように、難民側に義務づけられた。当時、毎月数千人の難民

がネパール国内に流入したため、定住化しないように、簡易住宅しか許さなかった。10万人以上の難民が、特に難民キャンプ周辺にさまざまな影響を与えた。その1992年の時から、ネパール政府が難民を臨時滞在者としてしか見られないこととなり、現在に至るまでいち早く難民を故郷のブータンに帰国させたいと考えている。筆者が1993年3月にはじめて難民キャンプを訪れた時、まだ青空教室が多かった。3シフトの形で朝から夕方まで、教師の負担が大きかったのである。しかし、その年の末までに全てのキャンプには、竹の棒のみの、藁屋根つきの学校が建設されたのである。とは言え、雨と風に弱い建て方で現在まで変わりが無い。1999年8月の雨期の際、学校を見学した時、どの教室にも水溜りがあって、学習環境がよいとは言えない。教室の家具や一部の教材は難民キャンプ内で規模の小さい職業訓練プログラムで作られ、その他は地元の業者と作業所によって提供されている。財政難および教材の限定されている数の問題を解消するため、各学校に提供されている教材等の質をチェックする委員会が設置された。その他に教材等の使用状況をチェックするもうひとつの委員会が各学校に設置され、それは限定されている教材と年々に増える生徒数に対応できるためである(注意17: UNHCR "FINAL SUB-PROJECT", p. 9, 17)。しかし、教材の面で恵まれている学校の教師でさえが、筆者に対して特に物理や科学の教材の補給がないと訴えていたのである。試験管、機械等が壊れた場合、一切補給がないという問題である(99年3月8日、ベルダンギ-IIのキャンプ内)。

3. シラバスの制度

1991年と1992年の時、学校教育がネパールのシラバスに基づいて行われたが、ブータン難民の先生が不慣れ、またはレベルの差(英語等においてブータンの教育水準がより高い)のため、92年末から試験的、1993年から本格的に、ブータンのシラバスに基づいて、ブータン難民の教師がCaritasの担当者とともに作成した教科書が導入された。ブータン難民の先生の動員力となったのは、Students Union of Bhutan (SUB) と言う組織であったが、政治色が強かったため、数ヶ月後、Bhutanese Refugees Education Coordinating

表4 学年度別の週間教科表 (PP-小3)

科目	PP	Class I	Class II	Class III
英語	5	5	10	10
数学	5	5	10	10
EVS	5	5	8	8
ネパール語	5	5	7	8
合計	20	20	35	36

(EVS = Environmental Studies)

表5 学年度別の週間教科表 (小4-中2)

科目	Class IV	Class V	Class VI	Class VII	Class VIII
ネパール語	8	8	8	8	8
数学	9	9	9	8	8
英語	10	10	10	9	9
社会	5	5	6	6	6
物理	6	6	6	7	7
ツォンカ語	3	3	3	3	3
道徳	1	1	1	1	3
合計	42	42	42	42	42

(各授業の時間が40分で、4年生以降になると、週2時間のCo-curricular activities〔討論、ゲーム、クイズ、文化学習、作文やスピーチコンテスト、スポーツ等〕が上記の42時間に加わる)
(注意18:上記の表4と表5の資料提供は Caritas Nepal, Damak, 2000年3月11日)

Comittee (BRECC) に変わり (1992年12月～1993年3月)、そして1993年4月以降、国連の要請で、CARITAS NEPALのもとで、Bhutanese Refugee Education Programme (BREP) と名称が変更された (注意18: CARITAS NEPAL, Damakの Amalraj 神父の情報、2000年3月10日)。そして、現在は、シラバスが4年生から、または特に5年生の時にネパールのシラバスにほとんど合わせてある。なぜかと言うと、ネパールの学校制度は5・3・2であるため、各段階に試験があるのである。だが表5で分かるように、ブータンのシラバスが4年生から8年生まで Dzongkha (ツォンカ語: ブータン国語のひとつである、王系民族が話すチベット語の方言)をはじめ、社会、英語と数学を通じて残っている。ツォンカ語が1996年に試験的に始められ、1997年以降、全ての学校で教えられるようになった。この科目の導入が形式的なものでなく、筆者は難民の帰国意思が強いという証拠であると解釈している。ブータンに帰国する時、上記に述べた、義務

となっているツォンカ語をもって、ブータンの社会に溶け込めやすくなるのが狙いであると考えてよいと思う。

4. 教科書の作成

難民の教育がネパールのカリタスとブータン難民の先生が各科目のテキストを作成し、原則として全ての生徒が一冊ずつ持っている。だが、上記の生徒数の表2で分かるように、高学年の年々の人数増加によって、今後数年間の財政的負担がさらに重くなるに違いない。教科書の質がレベル高いと言えるが、参考資料、特に英語の百科事典や辞書等は不足しているため、生徒と教師の両側の学習が妨げられている。国連が提供している教育費が少ないために、上記のような参考図書が寄付されることに依存していると言える (筆者が代表となっている AHURA JAPAN = Association of Human Rights Activists Japan が1996年以降参考資料等を寄付してきた。または、筆者が2000年3月8日に、現地のカリタス・ネパールの責任者の

一人である Varkey 神父さんにも百科事典が極めて不足していると言われ、AHURA JAPANが寄付した2セット以外、難民学校にはおいていないと聞いてショックを受けた。

5. 小学校低学年の英語教科書の分析 (小学校1年-3年)

学校授業の使用言語が英語であり、そのため、上記の表4と表5で分かるように、英語教育が重視されている。下記、最初の3年間の英語教育を分析することにする。基本的理念は、実用英語を実施し、「説明でなく、英語の使用を通じて学習すること」である (注意19: Bhutan Refugee Education Programme "Class III, English Teacher's Manual", Caritas Nepal, 1996, p.275)。

表6 Class IXとClass X (中3-高一)の週間科目表

科目名	Class IX	Class X
X ネパール語	5	5
数学	6	6
英語	5	5
物理	5	5
社会	5	5
健康、人口、環境	4	4
道徳	1	1
合計	42	42

(注意23: 2時間 co-curricular activities が別にある、表6.7の資料は上記 Caritas Nepal, 29.Febr.2000)

表7 生徒数 (2000年2月29日現在、[] 内1998年末現在)

キャンプ名	Class IX			Class X			合計
	男	女	小計	男	女	小計	
ベ	361 [208]	192 [76]	553 [284]	192 [150]	66 [62]	258 [212]	811 [496]
サ	111 [93]	59 [44]	170 [137]	77 [58]	35 [22]	112 [81]	282 [218]
ゴ	92 [58]	57 [26]	149 [84]	59 [52]	26 [24]	85 [76]	234 [160]
ク	72 [36]	25 [11]	97 [47]	36 [48]	12 [15]	48 [63]	145 [110]
テ	93 [53]	36 [32]	129 [85]	50 [0]	29 [0]	79 [0]	208 [85]
	729 [448]	369 [189]	1098 [637]	414 [308]	168 [123]	582 [432]	1680 [969]

(ベ = Beldangi - II, サ = Sanischare, ゴ = Goldhap, ク = Khudunabari, テ = Timai各キャンプには一校のみ、Beldangi - I, Beldangi-II-Extension には同様の学校がない。資料1の表を多少変更した計算)

表8 卒業試験の結果

年度	受験生	合格	合格率(%)
1992	11	2	18
1993	92	58	63
1994	103	92	81
1995	213	176	83
1996	303	229	75
1997	342	291	85
1998	425	308	73
1999	592	(試験実施は2000年4月)	

(注意25: CARITAS NEPAL, FINAL SUB-PROJECT..., p.6. CARITAS NEPAL, Jhapa, Amalraj 神父さんの情報提供2000年3月10日, 13日)

そのため積極的な参加型学習が実施されているし、さらに holistic approach (文章全体を学習する) に基づいて、生活環境を配慮しながら context related 英語を身につけている。または、一年生の時から衛生感覚を育てる例文を導入し、礼儀正しさを英語を通じて学ぶのである (注意20: "Class I English /EVS" Caritas Nepal, BREP, Birtamod, Jhapa, Nepal, 1994, p.25)

または、難民キャンプの生活場面の例文が多く、例えば教室や住んでいるヒュッテと国際NGOの建物との位置関係等 (注意21: Bhutanese Refugee Education Programme "Class II English Teacher's Manual", Caritas Nepal, 1995 p.7, 11等) もちろん自己紹介できるように一年の時から、ブ

ータンの出身地域、市町村、または住んでいる難民キャンプの名前とその中での住所を含む。例文の内容としては、やはりブータン国内の衣食住の文化をはじめ、国王、航空会社等も登場している。特に3年生の時からブータン人としてのアイデンティティを育つことに注意が払われている（注意22：例えば難民となった経緯等、同上、p.211）。そして3年生の内容はさらに国際的となり、Robinson Crusoe, Anne の日記等が登場し、世界の宗教の紹介の他に人権感覚を磨けるように、差別用語やいじめの分析、障害者への理解も含まれている。と同時に1と2年生で中心となっていた人物の民族名がブータンとネパールの社会を超えて、世界のさまざまな文化から取り入れてある。教科書の仕組みは幾つかのブロックとなり、ブロックの各目標が各週に分かれ、たいへんシステム化されていると言える。

6. Class IX と X (Secondary Education) の教育

上記にもすでに述べたように、この(中3と高1)の2年間の教育がCARITAS NEPALの独自予算で運営されている。1992年以降1か所のみ、ベルダンギー I のキャンプでClass IX, X が設けられ、1994年に全てのキャンプでClass IX が始まりClass X がベルダンギー II、サニシヤレ、ゴールドハブ、クドゥナバリの4箇所となった。テイマイキャンプでは1994年度だけClass IX が教えられ、1998年度再び導入と1999年度からClass X ができた。

表7を見ると、生徒数が増加したが、クドゥナバリのみが減少した。

7. SLC=School Leaving Certificate (学校卒業試験)

上記の試験は、毎年3月と4月中にネパール国内共通の卒業試験であり、ブータン難民は1992年度から受験できるようになった。初めは、キャンプ外の試験所で実施されたが、1998年以降、キャンプ内で実施できるように、ネパール政府が許可した(注意24：CARITAS NEPAL, Sub-Report, p.9)。ブータン難民の合格率が、最初の2年度のみ低かったが、後にネパールの生徒の40%前後の約2倍の高率になった(表8)。

上記の合格率の高さの背景としては、幾つかの

要因が考えられる。ブータンの学校教育のレベルが平均的に言って、ネパールでのレベルより高いという点。そのため教師のレベルも高いと言える。さらに留意すべき点としては、難民が教育を通して、難民の状況または難民キャンプでの生活を乗り越えることができる。と同時に、難民社会に役立つ仕事、特に帰国の道を開ける貢献もさらに可能になるのである。ブータン難民社会全体が教育の重要性を理解しながら、若い世代の教育に力を入れている。筆者が1993年以降8回難民キャンプの学校を見学や授業参加等で経験してきたが、悪い条件の中で(教室の不整備、窓のない教室や職員室、資格のないassistant teacher等、先生及び生徒の情熱、学習意欲等に毎回圧倒された。

8. 難民の教師の資格と研修

1991年以降、数多くの、ブータンで資格を取ってきた教師がいたが、特に1996年以降、数多くの優秀な先生がネパール社会(学校)で働くようになった。英語を初め、学歴と教育水準が高い、このブータン難民の先生がネパールの学校で歓迎された。と同時に、難民が、キャンプ内で教えるより、3、4倍の給料を得るようになった。Caritasの担当者2名が、1999年内に、400人の先生が退職し、恐らく一部が大学へ進学し、一部が地元の学校に移ったのであるが、はっきりした人数はつかめない(2000年3月10日、Caritas Nepalの事務所、ダマク市)。2000年3月始めにネパールの新聞で、難民がキャンプ外の労働が禁じられているにもかかわらず、毎日一人ほど、キャンプの外で仕事を求めて、地域社会に流れ、悪い影響を与える(現地の人より低い賃金で日雇い労働者になる)ので、地元との緊張関係が高まる一方のようである。その中に数多くの教師も含まれている(注意26：The Kathmandu Post, March 6, 2000, p.1)。筆者が1996年からCaritas Nepalの責任者に毎回この悩みが言われてきた。結局、高1(クラスX)を終えたばかりの若い人を採用する他に方法がないのである。(注意27：CARITAS Nepal "FINAL SUB-PROJECT", p.13)

教師の1週間の持ち時間が下記の通りである。

PP からClass III の持つ時間(クラス)が45時間
Class IV からClass VIIIまで32時間以上とco-

表9 学校教育関係の予算

	UNHCR (PP-Class 8)	CARITAS (Class 9,10)
1995	27000463,17 NRS	5912665,90 NRS
1996	30009906,95	4805944,11
1997	28770371,72	8118841,93
1998	33015466,75	5294352,25
1999	33054098,04	2489840,50

(注意29：Caritas Nepalの情報提供に基づいて、2000年3月10日に提供された情報。上記の金額には事務所運営費等全部が含まれている。100NRS = ネパール・ルーピーは現在〔2000年3月〕約60円である)。

curricularの2時間

Class IXからClass Xまで30時間以上とco-curricularの2時間

教師の研修はとても重視されてきた。教師の経験不足と教育向上をはかるため、数多くのワークショップが実施されている。例えば1998年の1年間の間に29回科目別のワークショップが実施された。合計の参加者は1,876名であった（注意28：CARITAS NEPAL "FINAL SUB-PROJECT", p.14）

その他に、学校休暇期間を除いて、毎週土曜日に、低学年と高学年のresearch teacherがワークショップを実施している。このような教師は一番専門的な知識を持ちながら他の教師を指導する立場にいる。

資料1でも分かるように、女性の教師の数は少ない。一番大きな理由として考えられるのは、ブータンの社会では女性の教師の伝統が全くなかったという点である。女子生徒にモデルを見せるために人数を増やすことが重要であるとCARITASが考えている。

学校の教師の仕事を評価する目的で、本来、ブータンにはなかったTeacher's Dayを（ネパールの例にしたがって）導入した。日本の文化祭に似ているし、音楽、おどり、歌等が演じられる。勿論、設備（スピーカー、楽器等）においてはまだ不十分な面がある。

9. 学校教育費全体の予算

生徒数の増加及びネパール国内の物価向上を考えると、UNHCRの予算が減少している。3年ほど前から、国連が近い将来、難民支援を停止するといううわさがあり、難民達は警戒しているが、幸いに国連側が支援を継続している（表9）。

10. 奨学金制度

Class Xを終了した後に、難民キャンプには進学校がないため、学習意欲の生徒がキャンプを離れないといけない。しかし、それを実現できるように、ほとんどの生徒が資金不足のため、スポンサを探さないといけない。下記の組織やNGOがキャンプ外の教育のため、奨学金を提供している。

10.1. CARITAS NEPAL

1997年にCaritas Nepalが先生の流出の傾向を阻止するため、787人の教師を対象に高学促進の目的で4,463,750NRSの奨学金を提供した。そして同年に、275名がClass XIとXIIを教師でありながら終了できるため、通信教育を受けられるように、728,000NRSの奨学金を出した。1998年に同じ目的で、269人のため、1,261,590NRSと1999年に446人1,361,785NRSの奨学金を提供することになった〔注意30：CARITAS NEPALの情報提供2000年3月10日〕。

学校の先生を確保するための狙いは、かならずしも実現できたとは言えないが、クラスXの修了者のほとんどが進学できたという意味で制度が実った。だがネパール国内、特に東南部の一部の学校のレベルでよいのかどうかという疑問が多少残る。または、数多くの方を支援していても、本当に貧しい難民が、特に物理（Science）専攻の学生が受験料でさえ払えないほど苦しんでいるようである。場合によって学校を中退するしかないと訴えている（2000年3月11日の面接で5人が筆者に提供した情報）。

10.2. DAFI = Albert Einstein German Academic Refugee Initiative

（ドイツのアルベルト・アインシュタイン難民支援基金）1993年以降、合計100人以上の優秀な難民の若者に大学教育と職業訓練を受けるた

資料1 ブータン難民の生徒数 (2000年2月末現在) (カリタスネパールの資料提供)

CARITAS Nepal																		Students' Statistics as of February 2000				
Bhutanese Refugee Education Programme																						
S/N.	CAMPS (SCHOOLS)	CLASS / STANDARDS										TOTAL	% Boys/ Girls	S T A F F					GRAND TOTAL			
		PP	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX			X	TEACHING		NON-TEACHING			TOTAL		
		M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	TOTAL				
1	BELDANGI-I (Green Vale Academy)																					
	# Sector Schools																					
	# Extensions																					
	# Sections	10	10	15	13	18	12	15	7	4												
	Boys	300	285	435	379	457	373	478	256	138								3,101				
	Girls	311	333	450	380	483	303	398	144	51								2,853				
	Sub-Total(B+G)	611	618	885	759	940	676	876	400	189								5,954				
2	BELDANGI-II (Panch-Oil English School)																					
	# Sector Schools																					
	# Extensions																					
	# Sections	13	16	20	18	18	16	17	12	6												
	Boys	393	521	581	469	482	473	561	402	215								4,097				
	Girls	386	464	565	547	556	435	445	302	112								3,812				
	Sub-Total(B+G)	779	985	1146	1016	1038	908	1006	704	327								7,909				
3	BELDANGI-II Extn (Marigold Academy)																					
	# Sector Schools																					
	# Extensions																					
	# Sections	7	6	7	8	11	7	11	6	3												
	Boys	216	190	224	216	285	212	341	204	78								1,966				
	Girls	228	202	208	234	356	180	303	109	48								1,868				
	Sub-Total(B+G)	444	392	432	450	641	392	644	313	126								3,834				
4	SANISHARE (New Horizon Academy)																					
	# Sector Schools																					
	# Extensions																					
	# Sections	12	12	17	14	17	17	19	10	4	3	2										
	Boys	320	355	511	403	498	465	591	349	169	111	77						3,849				
	Girls	363	351	495	426	478	478	455	198	67	59	35						3,405				
	Sub-Total(B+G)	683	706	1006	829	976	943	1046	547	236	170	112						7,254				
5	GOLDHAP (Blooming Lotus English School)																					
	# Sector Schools																					
	# Extensions																					
	# Sections	5	7	8	7	8	5	8	6	3	3	2										
	Boys	158	199	253	171	220	222	272	191	86	92	59						1,923				
	Girls	136	220	236	205	208	206	200	117	43	57	26						1,654				
	Sub-Total(B+G)	294	419	489	376	428	428	472	308	129	149	85						3,577				
6	TIMAI (Oasis Academy)																					
	# Sector Schools																					
	# Extensions																					
	# Sections	6	6	10	7	8	7	8	5	4	3	2										
	Boys	184	177	293	223	214	211	200	152	122	93	50						1,919				
	Girls	174	177	339	196	224	167	182	94	82	36	29						1,700				
	Sub-Total(B+G)	358	354	632	419	438	378	382	246	204	129	79						3,619				
7	KHUDUNABARI North (Sun Rise Academy)																					
	# Sector Schools																					
	# Extensions																					
	# Sections					2	6	15	5	3	2	1										
	Boys					52	182	425	157	70	72	36						994				
	Girls					53	165	349	78	39	25	12						721				
	Sub-Total(B+G)					105	347	774	235	109	97	48						1,715				
8	KHUDUNABARI South (Drak Model School)																					
	# Sector Schools																					
	# Extensions																					
	# Sections	7	9	14	11	10	5															
	Boys	211	259	378	284	283	132											1,547				
	Girls	229	288	439	347	295	135											1,733				
	Sub-Total(B+G)	440	547	817	631	578	267											3,280				
9	BELDANGI II (Tri-Ratna Secondary School)																					
	# Sector Schools																					
	# Extensions																					
	# Sections									10	5	15										
	Boys									361	192	553						68.19				
	Girls									192	66	258						31.81				
	Sub-Total(B+G)									553	258	811						100.00				
	GRAND TOTAL																					
		Primary (PP-VIII)					Secondary (IX-X)					Total (Pri.+Sec.)										
		Boys	Girls	Total		Boys	Girls	Total		Boys	Girls	Total										
		18,806	17,467	36,273		1,143	537	1,680		19,949	18,004	37,953										
	BOYS	1,782	1,986	2,675	2,145	2,491	2,270	2,868	1,711	878	729	414	19,949					52.56				
	GIRLS	1,827	2,035	2,732	2,335	2,653	2,069	2,332	1,042	442	369	168	18,004					47.44				
	Sub-Total(B+G)	3,609	4,021	5,407	4,480	5,144	4,339	5,200	2,753	1,320	1,098	582	37,953					100.00				
	% Boys	49.38	49.39	49.47	47.88	48.43	52.32	55.15	62.15	66.52	66.39	71.13						52.56				
	% Girls	50.62	50.61	50.53	52.12	51.57	47.68	44.85	37.85	33.48	33.61	28.87						47.44				
	TOTAL	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00						100.00				

め、奨学金を提供してきた。1997年50人がこの奨学金で主にネパールとインドの大学で学び、1998年には60名の学生の内6名が卒業した。だが、高額な奨学金であったため、悪用されたケースが生じたので、1998年以降新しい受容者がなく、大学レベルの教育を受けるチャンスが少なくなり、難民の若者に大きなショックを与えた(注意31: UNHCR BRANCH OFFICE "Briefing Update, January 1998, Bhutanese Refugees in Nepal", 1998, Kathmandu, Nepal, p.2.。CARITAS NEPAL "FINAL SUB-PROJECT", p.8。または、CARITAS NEPALがDAFIに対し2001年から再び募集するように要請をしている、CARITAS NEPALの情報、2000年3月13日)

10.3. UNHCR

この奨学金が職業訓練が多く(約35乃至50名)、その他に15名がClass XIとXIIの奨学金を受けている。(注意32: CARITAS NEPAL, "FINAL SUB-PROJECT, p.11)

10.4. BRAVVE =Bhutanese Refugee Aiding Victims of Violence

難民が1993年が創立のNGOで、幾つかのプロジェクトを通じて、拷問やレイプされた難民の支援に勤めてきた。そして、1998年以降、奨学金を出し、現在はクラスXIの50名、クラスXIIの47名を支援している。年間の奨学金が平均20,000NRSである。(注意33: BRAVVEの代表Mangala Sharmaさんの情報、2000年3月13日)

10.5. AHURA JAPAN

AHURA JAPANが1994年以降Class XIとXIIの奨学金を2年ごとに提供してきた。第1期生が5人、2期生が12名、第3期生が22名(2年目18名)、2000年6月からの第4期生も18名の予定である。インドのレベル高い学校で学び、後に大学進学がより可能になるのは基本的方針である。第3期生から月約6千円の奨学金を約5千円に減らし(授業料、生活費、下宿等含む)、奨学金の受容者を増やす目的であった。DAFIの奨学金が停止されているので、AHURA JAPANが1998年に125名、2000年に248名の応募者であった。

11. 障害児教育

障害児教育(education for the special need children)。1995年に2箇所(Timai,

Khudunabari)各10人の障害児を中心に、プロジェクトが実施された。1996年以降、全キャンプで実施され、学校へ行かなかった児童が学校へ行くようになった。Save The Children Fund(SCF-UK)というNGOが中心となったが、アイルランド出身のカリタスの教師、または、ブータン難民の教師と両親が協力し、integrated educationが全ての学校で、PPからClass Xまで導入された(注意34: 1996年中、1259人の障害児が確認された、UNHCR SUB-OFFICE JHAPA, "Bhutanese Refugees in UNHCR-assisted Camps in Nepal - Briefing Note", November 1997, Nepal, 5枚目)。

全ての教師に対する啓発活動も行われた。いわゆる健常者の生徒が協力し、障害児の世話を勤めた。後に、SCF-UKが導入した"Children Forum"(子供自主グループ)のメンバーによって制度化された。難聴の子供がリップ・リーディングを学習し、各キャンプの10名の教師が点字を学習しSCFとNAWB(=Nepal Association for the Welfare of Blind)の協力で、生徒も学習できるようになっている(注意35: CARITAS NEPAL, FINAL SUB-PROJECT, p.15)。

1996の末にNADH(=Nepal Association for the deaf and hard of hearing)のネパール人の難聴の指導者7名が、関心のある難民の先生と医療関係の責任者、または生徒の両親及び生徒という3グループに分けて教えた。障害児の生徒が教える立場にもなり、まだ手話のできない生徒にそれを教えるようになった(注意36: SCFのプロジェクトの担当者の一人であった、ブータン難民の女性Gauri Giriさんの証言、2000年3月12日)。筆者だけでなく、海外の専門家がこの障害児教育の実践を高く評価している。

12. NFE=non formal education

UNHCRの予算で、OXFAM(イギリスのNGO)が実施の依頼を受け、1994年以降に難民キャンプで導入された。この教育は第1レベルの7ヶ月間で母語(ネパール語)と算数を提供し、4ヶ月間の第2レベルでは英語学習が中心であり、第3レベルの7ヶ月間で自主購読の養成が目的であった。さらに、各レベルの終了後、1ヶ月間の法律相談と生活問題解決訓練の指導が行われた。1997年中、4,982人の読み書きの出来ない難民(女性4,330人、

男性652人)が学習し、その内4,799(女性4,159人、男性640人)がコースを終了した。このNFEの際、健康、栄養、family planning、環境、多妻や未成年の結婚問題、ジェンダー、キャンプ規則等についての情報が提供され、いわゆるempowermentも充分配慮された。(注意38: UNHCR NEPAL "Bhutanese Refugee Education Programme in Camps", 18 March 1998, pp.3) 1998年以降、ツォンカ語も教えることになった。1999年以降LWS (=Lutheran World Service) というイギリスのNGOがOXFAMに変わってNFEを運営するようになった(注意37: CARITAS NEPAL の情報提供、2000年3月13日)。

まとめ

難民生活が長くなるほど、難民が教育の重要性に気がつき、優秀な教師達のもとで、早い段階、教育制度が確立されてきた。または、教育こそ難民の状況を改善できる手段として評価され、100%の就学率が可能となった。だが、Class IXとXの人数増加が今後大きな財政的負担になることが間違いない。(注意39: CARITAS NEPALの責任者の予想人数が2000年度〔7月から〕、Class IXが1044人、Class Xが1250人、そして2001年度の時、Class IXが2200人、Class Xが1188人である)。そしてClass Xを終了しても、さらに進学を希望している若者が大きな壁にぶつかる。財政的支援を得ないと、ほとんどの学生の夢の実現が不可能になる。現在奨学金を提供している組織が2、3年後さらに数多くの希望者と対応しないといけないようになる。または、支援を受けても、多くのブータン難民の若者がネパリー語に弱く、授業についていけないようである。それは、話すことでなく(家庭でネパリー語を使用している)、書き言葉にある。なぜかという、1989年の末から、ブータン政府によって、学校教育において、ネパリー語が禁止され、語学力の低下につながった。その証拠として挙げられるのは、多くの学生が上記のSLC試験で、ネパリー語の科目で、最低合格点の32点を僅かに超えている、あるいは二次試験を受けないといけないことになっている。それを筆者が今年3月、奨学金の応募者(248名)の成績証明書を分析した時、分かったことである。

しかいし、教育に熱心であっても、ブータンに帰国できることが可能になれば、キャンプ内外での実績がどのように生かされるのは、予測できない現状である。

文献

- AHURA BHUTAN, "BHUTAN A Shangrila without Human Rights", 1993, Jhapa, Nepal
- AHURA BHUTAN, "Victims of forced eviction", 1999, Aug. Jhapa, Nepal
- Amnesty International, "Bhutan: Human Rights Violations against the Nepali-speaking population in the South", 1992, London
- Amnesty International, "Bhutan: Appeal for the release of Tek Nath Rizal", 1994, London
- Amnesty International, "Bhutan: Forcible Exile", 1994, London
- Amnesty International, "Action File Khempo Thinley Oezer", 1998, London
- Appeal Movement Coordinating Council (AMCC), "Bhutan: Revocation of Citizenship" 1995, Jhapa, Nepal
- BARAL, Lok Raj, "Bhutanese Refugees in Nepal: Insecurity for Whom?", in L.R. Bara, S.D. Muni (ed.) "Refugees and Regional Security in South Asia", Regional Center for Strategic Studies, 1996, Colombo, Sri Lanka, p.152-177
- BASU, Gautam Kumar, "Bhutan, The Political Economy of Development", 1996, New Delhi
- BHUTAN REFUGEE EDUCATION PROGRAMM(BREP), "Class I English I/EVS", 1994, CARITAS NEPAL, Jhapa, Nepal
- BHUTAN REFUGEE EDUCATION "Class II English Teacher's Manual" 1995, CARITAS NEPAL, Jhapa, Nepal
- BHUTAN REFUGEE EDUCATION "Class III English Teacher's Manual" 1996, CARITAS NEPAL, Jhapa, Nepal
- CARITAS NEPAL, "FINAL SUB-PROJECT Monitoring Report (SPMR) (PART-II), 1999, Jhapa, Nepal
- CARITAS NEPAL, "Bhutanese Refugee Education Programme, Students Statistic as of 29 February, 2000
- DHAKAL, D.N.S., STRAWN, Christopher, "Bhutan: A Movement in Exile", 1994, New Delhi
- DIXIT, Kanak Mani, "The Dragon Bites its Tail", Himal, July/August 1992, p.7-30
- DORJI, C.T., "Blue Annals of Bhutan", 1995, Thimpu, Bhutan

- DORJI, C.T., "A Political and Religious History of Bhutan", 1995, Thimpu, Bhutan
- DRUK NATIONAL CONGRESS, "The Silent Suffering in Bhutan", 1994, Kathmandu
- DRUK NATIONAL CONGRESS, "The Silent Suffering in Bhutan", Second Edition, 1996, Kathmandu
- 外務省経済協力編 「我が国の政府開発援助ODA 白書下巻」、1996年、東京
- 外務省経済協力編 「我が国の政府開発援助ODA 白書下巻」、1998年、東京
- HOFBAUER, Helmut, "Bhutan", in:P.Baehr, L.Sadiwa, J.Smith(ed.) "Human Rights in Developing Countries, Yearbook 1996", 1997, Kluwer Law International, The Hague, p.75-115
- 今枝由郎 「ブータン」、1994年、大東出版社、東京
- INFORMAL SECTOR SERVICE CENTER (INSEC), INTERNATIONAL CENTRE FOR LAW AND DEVELOPMENT(ICDL) (ed.), "The Bhutan Tragedy:When Will it End? Human Rights and Inhuman Wrongs". First Report of the SAARC Jurists Mission on Bhutan, 1992, Kathmandu
- INTERNATIONAL MOVEMENT AGAINST ALL FORMS OF DISCRIMINATION AND RACISM (IMADR), "IMADR Report on Bhutan", May 1994, Tokyo
- KALBFUSS, Elisabeth, "Special Report: Himalayan identity crisis:1,2", Gemini News Service, 1996, London
- MATHEW, Joseph C., "Ethnic Conflict in Bhutan", 1999, Nirala Publications, New Delhi
- MINISTRY OF HOME AFFAIRS, "The Southern Bhutan Problem - Threat to a Nation's Survival", 1993, Thimphu, Bhutan
- PEOPLES FORUM FOR HUMAN RIGHTS BHUTAN (PFHRB), "The Bhutan Observer", 1998, Kathmandu
- RAHUL, Ram, "Modern Bhutan", 1971, Delhi
- RAMAKANT and MISRA, R.C.(ed.), "Bhutan:Society and Polity", 1996, Nirala Publications, New Delhi,
- RUSTOMJI, Nari, "Bhutan The Dragon Kingdom in Crisis", 1978, Delhi, Oxford Univ.Press, Oxford,New York
- SHRI LHOMON NGAGYUR NYINGMA, "Release Khenpo Thinley Ozer Immediately", 1998, Birtamode, Jhapa, Nepal
- SINHA,A.C., "Bhutan Ethnic Identity and National Dilemma", 1991, New Delhi
- THE DEPARTMENT OF INFORMATION, "Anti-National Activities in Southern Bhutan", 1992, Thimphu, Bhutan
- THE UNITED FRONT FOR DEMOCRACY (UFD), "Bhutan Today", Sept., Oct.1998, Kathmandu
- THRONSON, David B., "Cultural Cleansing:A Distinct National Identity and the Refugees from Southern Bhutan", International Institute for Human Rights Environment and Development (INHURED International), 1993, Kathmandu
- UNITED NATIONS HIGH COMMISSIONER FOR REFUGEES (UNHCR), "Briefing Update, January 1998 Bhutanese Refugees in Nepal", UNHCR Branch-Office, Kathmandu
- UNITED NATIONS HIGH COMMISSIONER FOR REFUGEES (UNHCR), "Bhutanese Refugee Education Programme in Camps", 18 March 1998, UNHCR Branch Office, Kathmandu
- UNITED NATIONS HIGH COMMISSIONER FOR REFUGEES (UNHCR), "Bhutanese Refugees in Nepal", 4 January 2000, UNHCR Branch Office, Kathmandu
- UNITED NATIONS HIGH COMMISSIONER FOR REFUGEES, Sub-Office Jhapa, "Bhutanese Refugees in UNHCR-assisted Camps in Nepal Briefing Note", Nov.1997